

13. 東海洋上の初期タタキ技法

The paddle and anvil technique of Yayoi period in Japan Islands

深澤芳樹*

Yoshiki Fukasawa

* 奈良国立文化財研究所
Nara National Cultural Properties Research Institute.,
2-9-1, Nijo-cho, Nara 630-8002, Japan

(1) はじめに

土器を作る技術に、外面を羽子板や棒のような板で叩き、この力を内面で素手か石製・木製または土製の当具で受けて器壁を加工する、タタキ技法がある。これは、器表面の凹凸をならすにとどまらず、器形を大きく変えることすら可能な、すぐれて応用のきく技法である。

中国大陆においてこのタタキ技法は、仰韶文化に先行する江西省万年県仙人洞下層⁽¹⁾、あるいは陝西省を中心とする白家村文化⁽²⁾などに、現われている。仙人洞下層段階では、その北方に展開した土器⁽³⁾にまだタタキメの確実な報告例がなく、これに遅れて甘肅省から山東省にかけて成立した大地湾文化・白家村文化・裴李崗文化・磁山文化・北辛文化⁽⁴⁾・白石村文化⁽⁵⁾では、石皿と磨棒とを組み合わせ用いており、かつ丸底の鉢形土器（以下、器形の呼称で「形土器」を略す。）に小さな三足や環状の台をつけた土器を共有しているのであるが、土器のタタキメはこのうちの西側に偏在するらしい。これらの点からみて、中国大陆においてタタキ技法は、南あるいは西から北方あるいは東方へと広まった公算が大きい。他方東海洋上の日本列島では、今のところ縄紋土器にタタキメの発見例はなく、弥生土器にある。つまり巨視的には弥生土器のタタキメは、タタキ技法

が長い年月と道のりを経て、弥生時代になってようやく日本列島に到達したことを物語るのである。

となれば弥生土器のタタキ技法がどのような経路を辿って日本列島に達したか、いずれ問題になるだろう。そこで、それに備えて日本に分布する初期タタキ技法を、現在の知識の範囲内ではあるが、整理しておきたい。

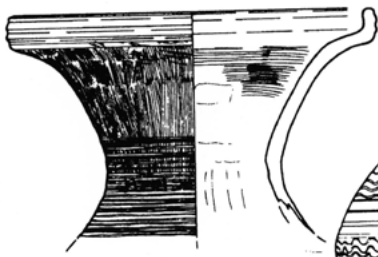
さて一色青海遺跡は、愛知県稲沢市に所在する。ここは日本列島のうちで弥生時代中期までにタタキ技法が広まった地域の東端に近い。だから本遺跡で出土した土器は、西日本の弥生社会がどのようなタタキ技法をどう受け入れ、それをどう伝えたか記憶している可能性がある。しかもこの地域の土器は、タタキメの残りがまれにみるほどよいので、タタキ技法を検討するのにはまたとない資料群なのである。

ところで現在の民族例でみると、タタキの用法はきわめて多様である⁽⁶⁾。つまりタタキ技法は決して画一的な技法ではないのだから、異同は充分に起りえる。本稿では主に前・中期弥生土器を対象にして、道具、工程、および身体技法の3点から、そのタタキ技法を検討する。

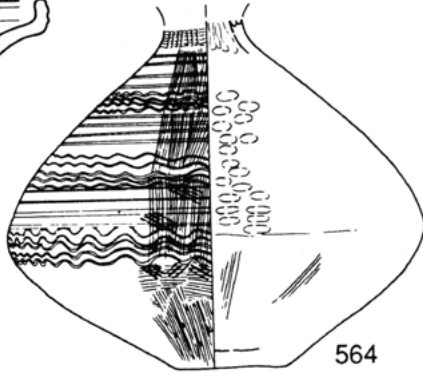
(2) 言葉の約束

一色青海遺跡では弥生時代中期後葉にあたる高蔵式土器がかなり出土した。今からこの土器を俎上に載せタタキメをみるのであるが、その前にここで用いる言葉について幾つか説明しておきたい。

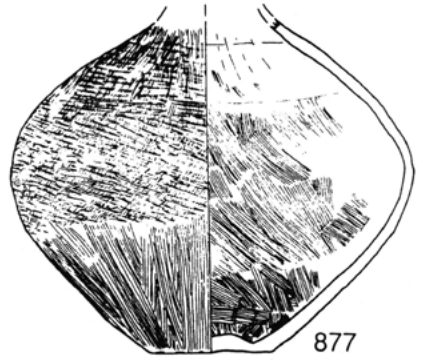
まず叩き板は、叩き部と握り部からなる。叩き部で土器にあてる面が平らなら、民族例や出土資料⁽⁷⁾でみると叩き板の形状は大抵が羽子板やしゃもじのような格好である。ここでは羽子板状



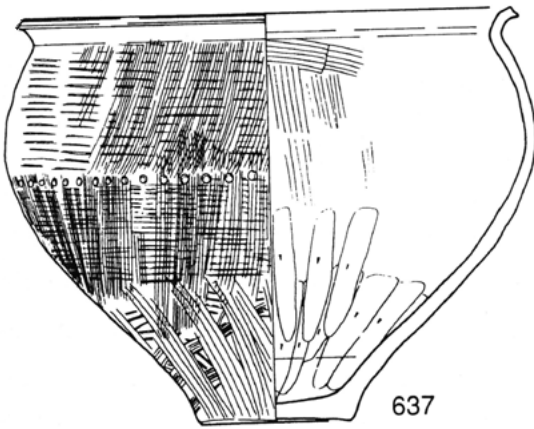
620



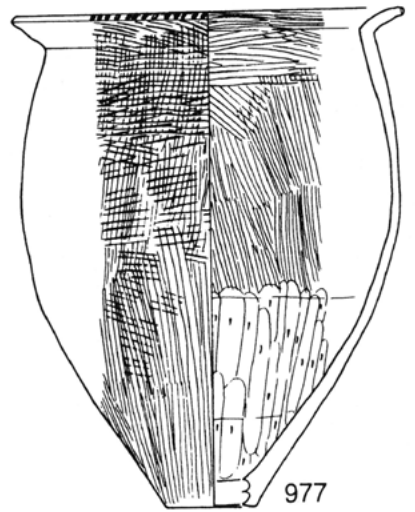
564



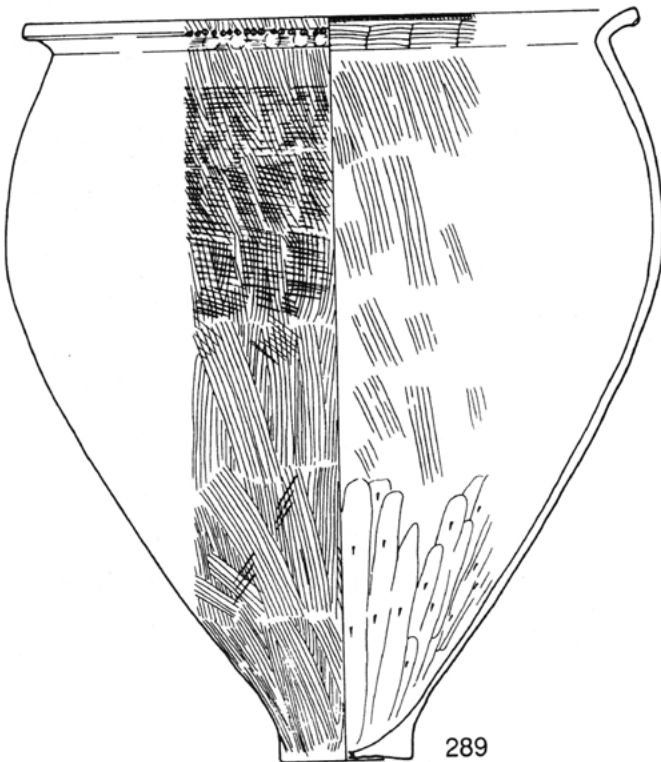
877



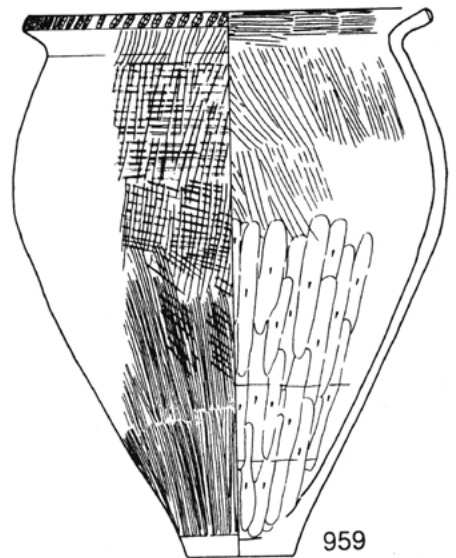
637



977



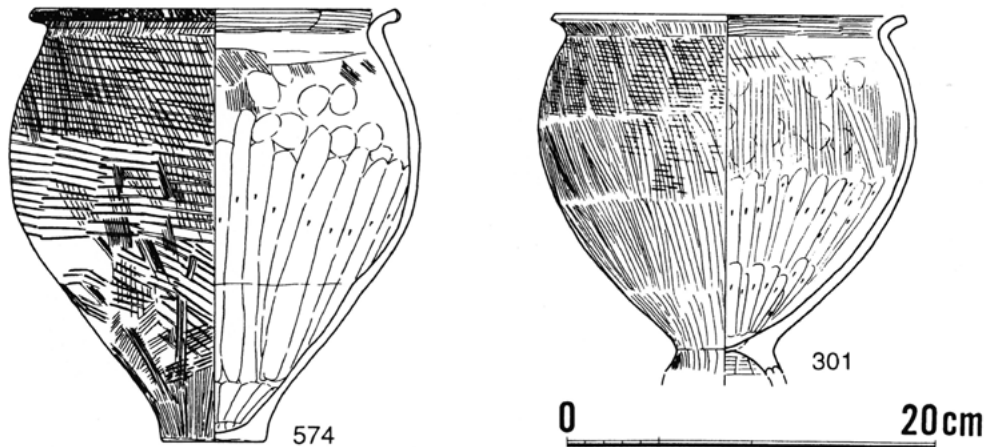
289



959

0

20cm



第13-1図 タタキのある土器

叩き板と呼ぶ。叩き部に紋様を刻まなければ無紋、紋様を刻んでおれば有紋とする。なお叩き部に縄を巻いていれば、有紋の仲間にいれる。ただし叩き板は木製がほとんどなので、はじめは無紋であつても使い込むと素面であつた叩き部の木目が浮きでてきて有紋のような効果をあげることもある。また平行タタキについて、器表面で溝をなす凹部が1 cmで何条あるかを、条/cmで表わす。

工程に関しては、放射状縦ハケメ⁽⁸⁾と厳密に区別した上で、体部外面の全面に行なう縦ハケメの工程を基準にする。つまりその前に行なうタタキを1次、後のタタキを2次と呼びわけ。そしてそれぞれでさらに細かな先後が問題になれば、1-1次、1-2次などと呼ぶことにする。

身体技法を推定するには、佐原眞氏が平瓦の凸面でみつけた「叩きしめの円弧」の視点⁽⁹⁾を使う。ここではそのタタキの効果は問わないで、タタキメの方向をのみ問題にし、円弧状タタキメと呼び換える。叩き板の主軸方向延長線上の交点をタタキメの中心と呼べば、土器の場合、一周して叩くわけだから、タタキメの中心は、三次元のある1点に固定せず、一定の高さを移動した可能性がある。そこでこれを中心高と呼び、肘の高さを示すとみる。そして弥生土器の場合は口を上にしてタタキを行なっているので、タタキメの中心が

土器に向かって左側なら作者は右利き、逆に右側なら左利きと判定する。

(3) 一色青海遺跡出土土器の観察

では、始めよう⁽¹⁰⁾。第13-1図をみていただきたい。なお土器の番号は、報告番号に一致する。

620は、口径19 cmの壺、体部と底部を欠く。S Z 13出土。外面に凹線紋のめぐる口縁部は受け口状を呈し、頸部に櫛描直線紋や櫛描簾状紋がある。この土器の口縁部の外面下端部に4条/cmの平行タタキメが残っている(第13-1図620)。タタキメは口縁に平行である。円弧状タタキメをなすのかどうかかわからないが、タタキメの方向から、肘を口縁部高にしてタタキを行なった可能性が高い。その後に縦ハケメ→横ナデをする。本例は、壺の口縁部も確実に1次タタキを行なったことを示す好例である。

564は、有紋の細頸壺、口頸部を欠く。S Z 05出土。体部上半部から下半部にかけて、4条/cmの平行タタキメがある(第13-1図564)。右下がりのタタキメは上半部よりも下半部で傾斜角度を強める。その後に行なった右上がりのタタキメが体部下半部にある。ともに1次タタキである。このうち右下がりのタタキメは明らかに円弧状タタキメをなす。中心高は頸体部境、中心は向かって左側

にある。右利きの作者が肘を頸部部境の高さでタタキを行なったのであろう。右上がりのタタキメは、肘の位置を明らかに下げたことを示している。上半部はさらに縦ハケメ→櫛描紋、下半部は縦ハケメ→下方向ケズリ→放射状縦ハケメへと工程が進む。

ところで体部上半部内面には深い縦シワが走る。このシワは上からみて螺旋状ではなくて放射状を呈するので、絞ったのではなく器壁を外側から垂直に圧したことを示している。貝田町式期の壺にも、シワはあるがこれほど深くはない。しかもタタキメは未発見である。だから高蔵式期に通有のこの深いシワを、タタキ技法と関連づけて、粘土を広めの径に積み上げておいて、これを叩いて細くした痕跡とみなせよう。となれば頸部の内径は3 cmと狭く、かつシワはつぶれていないので、この工程では内面に手や当具を添えていないことになる。

877は、無紋の細頸壺で、口頸部を欠く。SK 12出土。体部上半部に、4条/cmの平行タタキメがある。上部は水平、下部は右下がり、円弧状をなす。中心高は頸部部境あたりで、中心は土器の左側にある。それから縦ハケメをし、体部下半部外面はさらに下方向ケズリ→放射状縦ハケメへと作業工程が進む。体部上半部の内面には深い縦シワが放射状に走る。なお頸部は残部でも直径が6 cmと細く、私の手は入らない。これにも当具を用いた形跡はない。

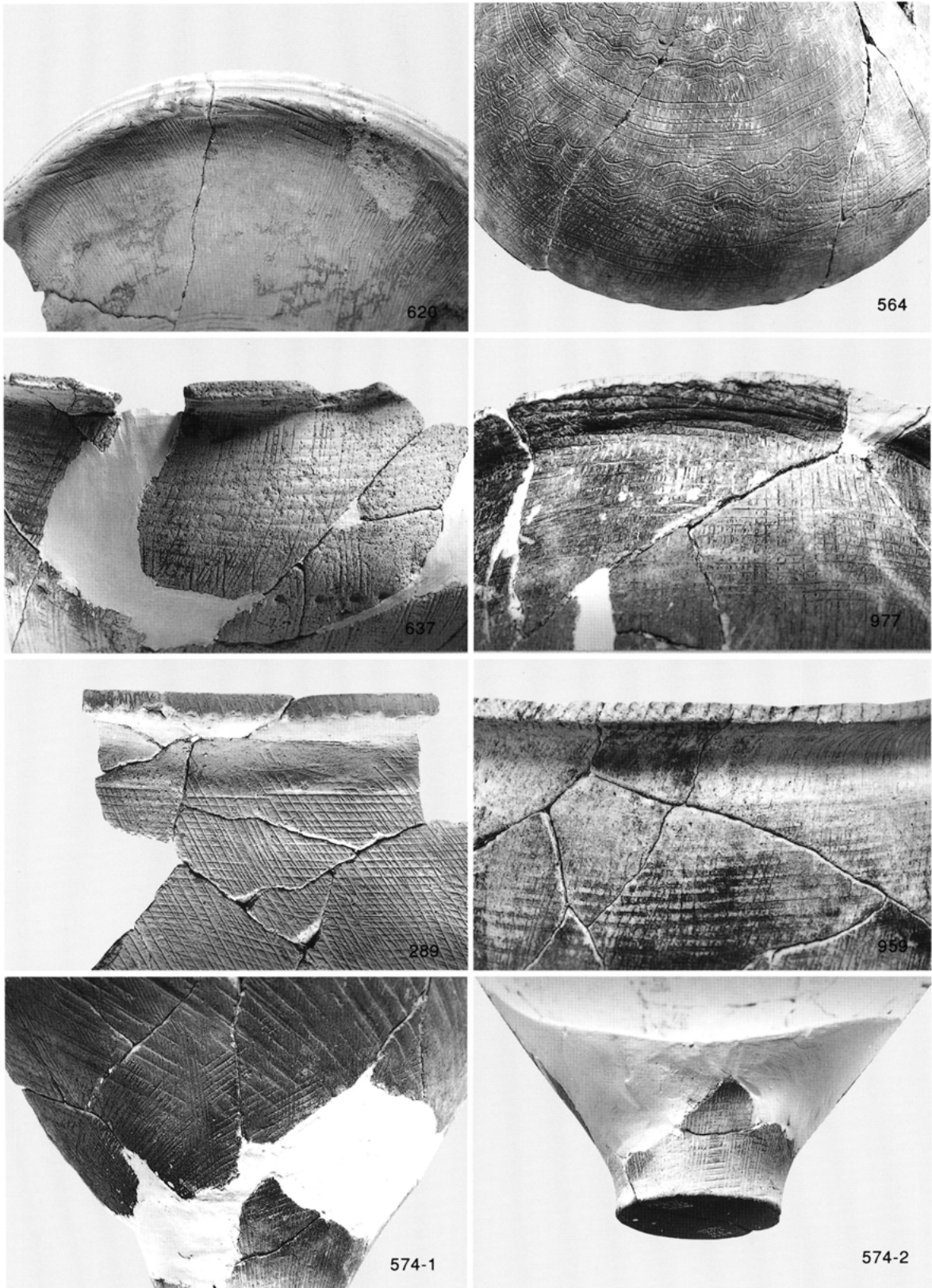
637は、口径26 cm・器高22 cmの鉢。SZ 13出土。この土器には異なった2種類の平行タタキメがある。1つは2条/cmで、体部上半部は口縁に平行(第13-²図637)、下半部は右下がりのタタキメである。中心高は口縁部高、中心が左側にあり、基本的に円弧状を呈するとみなすことができる。他はこの後のもので底部に近い部分に5条/cmの平行タタキメ、右上がりである。中心高は底部高、中

心は左側の円弧状タタキメをなす。だから右利きの作者は、肘の高さをまず口縁部高にして叩き、次に叩き板を持ち換え底部の高さに肘を移して作業したことが判明する。これらのタタキメは縦ハケメを体部全面に施してから行なった2次タタキである。それから最大径部に先端の丸い道具で刺突、および下半部に放射状縦ハケメを施す。

977は、口径21 cm・器高26 cmの甕。包含層出土。外面は煤で黒く、内面に環状こげつき痕がある。口縁部外面から体部下半部にかけて、4条/cmの平行タタキメがある。縦ハケメの前後に、1次タタキと2次タタキが観察できる。まず1次タタキの痕跡は口縁部外面と体部にあるやや右下がりのタタキメである。口縁部・屈曲部・体部にかけてタタキメが一連の箇所があるので(第13-2図977)、口縁部にタタキを行なった時はほとんど屈曲していなかったか、屈曲の度合いが弱かったはずである。中心高は口縁部高、中心が左側の円弧状をなす。それから口縁部をしっかりと折り曲げる。この時叩き板を外側にあてながら行なった可能性もある。次に外面に縦ハケメをする。その後、口縁部直下の体部上半部にやや右上がりのタタキメをつける。最後に下半部に放射状縦ハケメをする。本資料によって、甕においては、同一個体で1次・2次タタキの両工程を行なっており、1次タタキの工程では屈曲の度合いはるかに少なく、かつ中心高が口縁部高の円弧状タタキメをなしていたことがわかる。

289は、口径33 cm・器高40 cmの甕。SB 66出土。火に掛けた形跡はない。口縁部と体部の外面にタタキメがある。4条/cmのピッチのこのタタキメは、ハケメの条線と何等変わらない。これをタタキメと判定した主な根拠は、条線が6 cm前後で途切れており、その始点と終点にハケメに特有な揺れや振れが一切なく、その部分が平坦面をなしており、かつその配列が平行タタキメのそれに一

13. 東海洋上の初期タタキ技法



第13-2図 タタキメ各種

致していることにある(第13-²図289)。そこで、叩き部の摩滅した素面の叩き板を用いたとみた。口縁部外面には1次タタキメが残っている。これは口体部の屈曲部にもおよんでいるので、このタタキを行なう時は、今ほど屈曲していなかったはずである。それから指でおさえて口縁部をしっかりと外反させた。次に体部外面全面に縦ハケメを施す。なおハケメの溝も4条/cmで、叩き板のピッチに完全に一致する。それから体部に2次タタキを行なう。下半部ではタタキメとハケメを区別し難いが、少なくとも体部上半部で口縁部に近い部分ほど口縁に平行、下がるほど右下がりに傾斜する。円弧状の中心高は口縁部高付近で肘はこの高さにあり、作者は右利きであったはずである。下半部にある右上がりの条線は、タタキメの可能性が高いが縦ハケメと区別しにくく確定しない。肘を底部高に移して叩いた可能性を指摘するにとどめたい。最後に放射状縦ハケメを行なっている。

959は、口径21cm・器高29cmの甕。S K 49出土。体部外面には煤と2次的加熱痕が、内面には環状こげつき痕がある。体部には3条/cmの平行タタキメが残っている。2次タタキで、体部上半部で口縁に平行、下半部で右下がりである。このタタキメによっても他の諸例と同じく縦ハケメは消えておらずかつ鮮明であるから、この2次タタキも乾燥が進んでから行なっており、押し方が大変に弱かったことを明らかにする。またこのタタキメにおいて溝に平行する木目を観察できる(第13-²図959)。この木目の方向は無紋の木目の方向と合致し、かつ他の平行タタキメの方向とも一致するので、本例は平行タタキメを刻んだ叩き板が木目方向に溝を刻んでいたことを裏付ける資料である。最後に放射状縦ハケメを行なう。

574は、口径20cm・器高25cmの甕。S Z 51出土。体部から底部側面にかけての全面に、タタキメが明瞭である。平行タタキメで、太・細の2種類があ

る。どちらも2次タタキである。太いのは1.8条/cm、細いのは6条/cmである。縦ハケメ後にまず太いタタキを行なう。体部上半部では広い範囲が口縁部に平行、体部下半部では右下がりであるが、基本的には円弧状タタキメとみなすことができる。中心高は口縁部の付近にあって、中心は左側である。次に細いタタキを体部下半部に行なう(第13-2図574-1)。底部側面では僅かに右上がりである(第13-2図574-2)、上になるほど角度を強める。中心高は底部高付近、中心が左側にある円弧状タタキメをなしている。なおこの2回のタタキでは道具を持ち換えており、この作業工程が連続せず一旦途切れていたことを示している。最後に放射状縦ハケメを行なう。

301は、口径19cm・残存高21cmの台付甕。S B 68出土。縦ハケメ後の2次タタキの痕跡が体部上半部にある。平行タタキメで、4.5条/cmである。口縁に平行する。下半部には放射状縦ハケメがある。本例は、東海地方に特有な器形もタタキ技法を用いて作っていたことを明らかにする。

(4) 一色青海遺跡のタタキと西日本のタタキ

タタキメに注意して、一色青海遺跡で出土した中期後葉の弥生土器をみてきた。では次にその観察結果をまとめ(以下、Aと表わす。)、これが西日本のタタキ技法(以下、Bと表わす。)に通ずるか確かめてみよう。

①活用度

A：一色青海遺跡では、確実にタタキ技法を用いて作った土器が出土しており、それは壺、鉢、甕におよんでいる。さらに細頸壺や台付甕のようにこの地域に特有な器形にもあった。

B：タタキメを観察できる土器は、弥生時代中期においては西日本に広く分布する。橋口達也氏は、九州地方ではタタキ技法は前期まで遡るとし、日用土器や大型の甕棺のタタキ資料を示し

た⁽¹¹⁾。都出比呂志氏は、畿内地方における中期と後期のタタキ技法の違いを細かに指摘した⁽¹²⁾。西日本各地の土器の実際は膨大な報告の示すとおりである。さてタタキメが最もみつきやすいのは甕で、体部上半部の調整が比較的粗雑な部分である（第13-2図）。だが調整の丁寧な壺でも、タタキメは西日本の各地で見ついている。その主だった遺跡名を掲げてみると、福岡県剣塚遺跡⁽¹³⁾、岡山県津寺遺跡⁽¹⁴⁾、同百間川今谷遺跡⁽¹⁵⁾、香川県久米池南遺跡⁽¹⁶⁾、徳島県名東遺跡⁽¹⁷⁾、高知県下分遠崎遺跡⁽¹⁸⁾、兵庫県養久山・前地遺跡⁽¹⁹⁾、同玉津田中遺跡⁽²⁰⁾、大阪府大里遺跡⁽²¹⁾、同亀井遺跡⁽²²⁾、和歌山県宇田森遺跡⁽²³⁾、奈良県唐古・鍵遺跡⁽²⁴⁾、鳥取県岩吉遺跡⁽²⁵⁾、京都府長刀鉾町遺跡⁽²⁶⁾、同千代川遺跡⁽²⁷⁾、石川県戸水B遺跡⁽²⁸⁾、滋賀県高田館遺跡⁽²⁹⁾、同服部遺跡⁽³⁰⁾、岐阜県東町田遺跡⁽³¹⁾、三重県納所遺跡⁽³²⁾がある。

さらに器形や調整法など地域色を示す特徴に照らしてみた場合、西日本の各地でタタキ技法を活用し形を変えるなどして様々な器形の土器を作っていた可能性がきわめて高い⁽³³⁾。

②. 道具；叩き板

A：叩き部はすべて平面をなしており、木目とタタキメのあり方からみて、木目に沿う木取りを行なった羽子板状叩き板を用いたと推定できる。叩き部には無紋と有紋とがある。紋様はすべて平行タタキメで、木目に平行に溝を刻んでいる。

B：叩き部は、平面と曲面の2種類がある。

まず羽子板状叩き板の叩き部には、無紋と有紋とがある。この叩き板は、横山浩一氏の指摘⁽³⁴⁾どおり主軸方向に木目の走る木取りを行っており、木目に平行に溝を刻んでいる。それは、素面タタキメと平行タタキメの木目の方向が合致し、しかも体部上半部で口縁に平

行するなどタタキメの配列パターンが西日本に広く共通する点とも符合する。

叩き部が素面の実例は、現在までに福岡県比恵遺跡（高潞式）⁽³⁵⁾、岡山県津寺遺跡⁽³⁶⁾、奈良県四分遺跡⁽³⁷⁾、鳥取県岩吉遺跡⁽³⁸⁾で見つかった。この分布状態からみて、素面タタキは西日本一円に広まっていた可能性が高い。

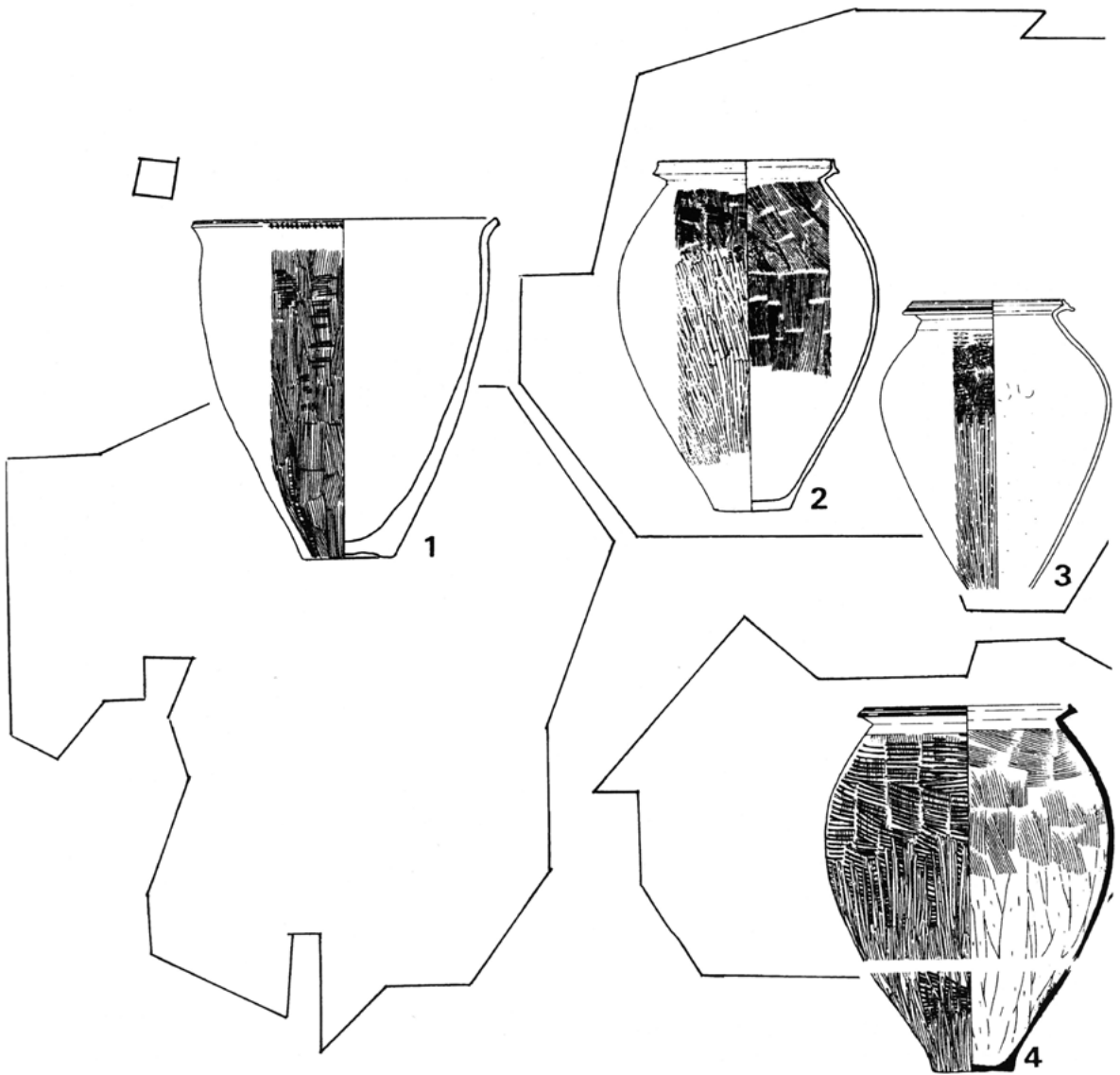
また有紋のうちでは、平行紋が圧倒的に多い。これ以外にまれに格子、渦巻、流水などの紋様がある⁽³⁹⁾。福岡県立岩遺跡K-34例⁽⁴⁰⁾を除けば、分布の中心は畿内地方にある。

この羽子板状叩き板のほかに、叩き部の断面形が曲面をなす丸棒状の叩き板がある。中間研志氏は、これを報告書で「太い棒状工具」と呼んだ⁽⁴¹⁾。橋口氏が「大形のタタキ痕」⁽⁴²⁾のある実例として挙げた福岡県吉ヶ浦遺跡第4号甕棺上蓋を九州歴史資料館の収蔵庫でみて、私は棒状叩き板の存在を確認した⁽⁴³⁾。ところで1937年に中国蘭与ヤミ族を訪れた鹿野忠雄氏は、そこで羽子板状叩き板と棒状叩き板の双方を土器作りに用いているのを目撃した⁽⁴⁴⁾。考古資料では叩き板の出土自体大変にめづらしいのだが、中国江西省鷹潭市角山窯址で商代に遡る土製叩き板が出土しており、羽子板状叩き板と棒状叩き板からなっていた⁽⁴⁵⁾。棒状叩き板によるタタキ痕は今のところ九州地方以外ではみつかっていないが、巨視的にみた場合決して孤立したものではないことを、これらの資料が示している。

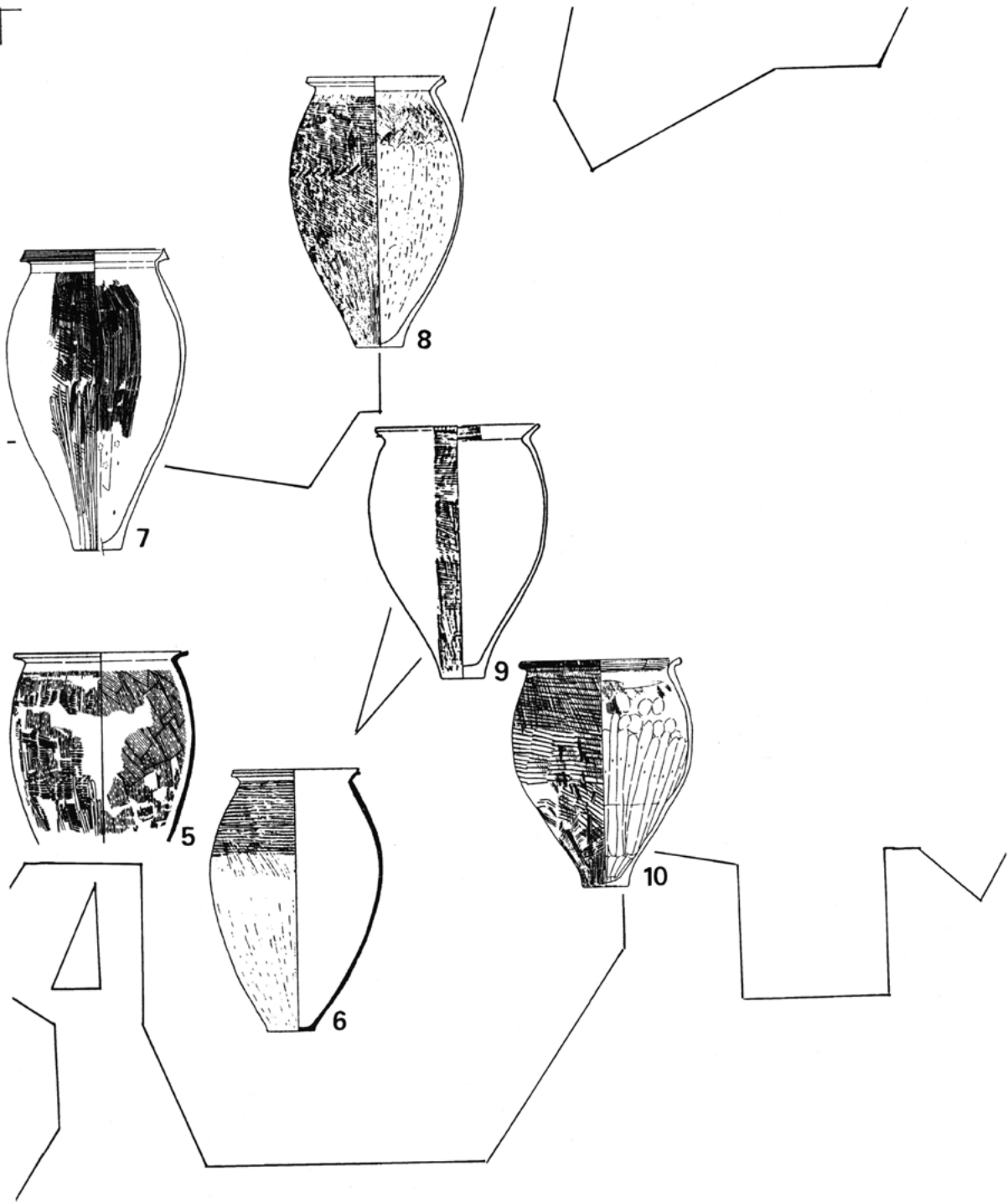
③道具；当具

A：当具の明確な痕跡はないし、当具は常用せず、用いないこともあった。素手をあてる以外に何か道具を用いた可能性はある。

B：古代中国には各種の当具があるが、このうち民族例にあつて、かつ日本で出土しているのは、茸形の当具である。これは遅くとも竜山文



13. 東海洋上の初期タタキ技法



第13-3図 タタキ技法の広がり（土器の縮尺は1/7）

（1 福岡県剣塚遺跡 2 広島県神辺御領遺跡 3 岡山県津寺遺跡 4 徳島県名東遺跡 5 兵庫県玉津田中遺跡
6 奈良県唐古・鍵遺跡 7 鳥取県岩吉遺跡 8 石川県戸水B遺跡 9 滋賀県鴨田遺跡 10 愛知県一色青海遺跡）

化以降⁽⁴⁶⁾の中国においては主要な当具であった。この葺形当具は、日本では福岡県宮の前遺跡例が最古であって⁽⁴⁷⁾、弥生時代末にしか遡らない。これ以前においては当具が木製であった形跡はないし、当具と特定できるような石製品や土製品はみつかっていない。井上裕弘氏が土器内面のくぼみから推定したように⁽⁴⁸⁾、素手以外では片手で握れる程度の円礫を用いたのであろう。

④工程

A：タタキを行なう工程は、縦ハケメの前後にある。このうち1次タタキは、甕のほか壺でもみつかるので、高蔵式期に新に現われた型式のほとんどの土器が縦ハケメの前にタタキを行っていた可能性が高い。これに対し2次タタキは、体部上半部など調整の重複が少ない部分なら、みつきやすいはずである。だからそのみつかった鉢と甕しか2次タタキは行なわなかったのだろうか。

1次タタキには、口縁部におよんでいるものがあり、円弧状タタキメをなし、かつ粘土の接ぎ目にもぐり込む例がない。これらの事実、ここでみた大きさの土器なら、1次タタキ

は、粘土の積み上げが口まで達してから行なったことを示す。器壁を積み上げた直後の形は、シワの状態からみである程度完成品に近かったはずであるが、屈曲の度合は完成品に比べてかなり弱かったに違いない。タタキ技法を活用し、土器の形を変更した。

2次タタキは、体部上端部では口縁部にあてぬよう、口縁部に平行に叩いている。また縦ハケメの残り具合からみて、押し方は大変に弱く、したがって視覚的な効果しかなかったのではないだろうか。

B：畿内地方の中期のタタキは2次タタキが基本であったと、都出氏は指摘する⁽⁴⁹⁾。がしかし2次タタキは兵庫県玉津田中遺跡⁽⁵⁰⁾や奈良県四分遺跡⁽⁵¹⁾、また岐阜県東町田遺跡⁽⁵²⁾など近畿地方から東海地方西部に限られている。畿内地方を含めた近畿地方においてすら1次タタキの実例は数多くある。さらに橋口氏によれば福岡県下では前期以来1次タタキであり⁽⁵³⁾、また広島県神辺御領遺跡⁽⁵⁴⁾、岡山県津寺遺跡⁽⁵⁵⁾、香川県久米池南遺跡⁽⁵⁶⁾の資料中のタタキメは確実に1次タタキであった。つまり前・中期には1次タタキこそが、西日本一円に共通す



る基本的なやり方なのであって、2次タタキは一部地域で工程を追加することによって現われた地域色とみなすべきである。

なお1次・2次タタキのあり方は、一色青海遺跡の場合に一致する。

⑤身体技法

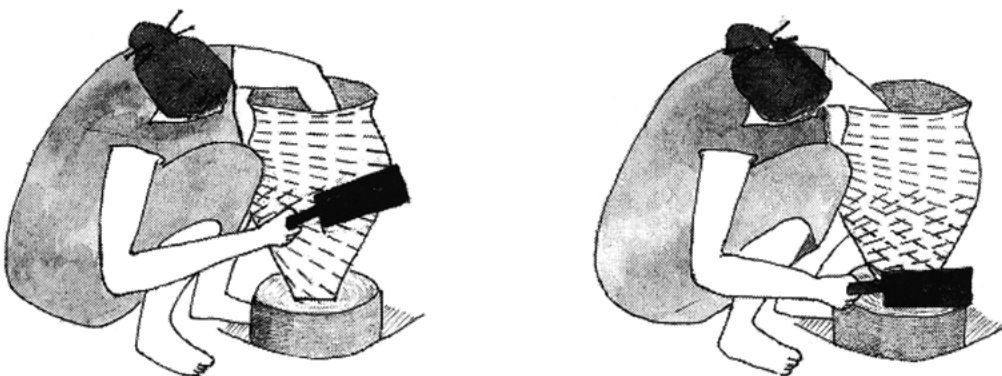
A：円弧状タタキメのあり方からみて、土器は台上にのせて作業したはずである。底部側面のタタキメからみて、土器を傾けて叩くこともあったが、基本的には平坦な作業台の上に正立させたままで行なった。タタキメは、基本的に円弧状をなしており、中心高は任意の高さを連続的に移動しない。壺で口縁部高・頸体部境高・底部高、鉢や甕で口縁部高・底部高にとその位置は固定的である。つまり作者はそれらの位置に肘の高さを段階的に移してタタキを行なった。しかも底部高の場合に限って、腕を上げて叩く。他は、腕は水平か下げて叩き、体部の上半から下半にかけてかなり広い範囲をタタキの対象にした。円弧状タタキメの中心はほとんど左側にあつて、作者の大多数は右利きであつた。

B：例えば甕の場合、西日本で器高が大体40cm以

下なら体部上端部では円弧状タタキメは、口縁にほぼ平行し、下がるほど右下がりとなる点で共通する。もしこれよりもっと大きければ、手が届きにくいので、積み上げては叩き、積み上げては叩きと、これらの工程を繰り返さねばならなかったはずである。

底部側面にタタキメのみつかった実例は、一般に体部外面下半部は調整が特に丁寧なのと中国・四国地方や畿内地方ではさらに底部側面に横ナデがあつてタタキメの観察には不利であるが、それでも福岡県栗山遺跡⁽⁵⁷⁾、兵庫県中山遺跡⁽⁵⁸⁾、同玉津田中遺跡⁽⁵⁹⁾、鳥取県岩吉遺跡⁽⁶⁰⁾、石川県戸水B遺跡⁽⁶¹⁾、岐阜県東町田遺跡⁽⁶²⁾で見つかっている。このほかに、中心部高が口縁部にありながら底部側面にタタキメのおよぶ例が、京都府千代川遺跡⁽⁶³⁾にある。これらの実例から、タタキメ技法は基本的に土器のほぼ全面におよんでいたと推定できよう。

円弧状タタキメの中心高の位置は、壺で口縁部高・頸体部高・底部高、甕で口縁部高・底部高が普通である。すなわち作者は肘を土器の上下端部や屈曲部の高さ付近に固定してタタキを行なった。またその時腕は、タタキメの重複関



第13-4図 土器を叩く、四態

係からみて、一周叩き、上→下または下→上へ肘の角度を少し変えてはまた一周叩いていった。だが上→下→上→下へとジグザグに叩いていった可能性も民族例からみて捨て切れない。さらに1次・2次と工程に違いがあるにもかかわらず、その身体技法は共通する。このうち底部高を中心高とするタタキは、叩き板を持ち換えた例のあることからみて、補足的な工程であった可能性もある。なお肘と土器との関係はあくまで相対位置だから、もし作者が立っているのなら台は高かったはずだし、しゃがんでいるのなら台は低かったはずである(第13-4図)。

ところで脚台部内面のケズリは、下からみて右回転が多い。これは円弧状タタキメの中心が一般に左側にあることから、作者は大抵が右利きであったとする解釈に符合する事実である。

(5) 弥生土器におけるタタキ技法の原形と東進の過程

一色青海遺跡において確かめたタタキ技法は、このように弥生時代前・中期に西日本に広まったタタキ技法に基本的に通底していた。

ではタタキ技法が現われた時期はどうか。橋口氏は福岡県剣塚遺跡例などから北部九州では弥生時代前期に遡るとする⁽⁶⁴⁾。瀬戸内海沿岸部では大分県下郡遺跡⁽⁶⁵⁾、岡山県百間川今谷遺跡⁽⁶⁶⁾、京都府神足遺跡⁽⁶⁷⁾、また太平洋沿岸部では高知県下分遠崎遺跡⁽⁶⁸⁾で、凹線紋が出現する前の弥生時代中期中葉に、また北陸地方・東海地方では、凹線紋が現われた中期後葉に、タタキメを確認できる。したがってタタキ技法は、まず九州地方に弥生時代前期に現われ、中期に東に広まったとみることができる。そこでタタキ技法のこの伝わり方を重視し、まず共通する点などから、九州地方

に現われた技法の復原を試み、それから棒状タタキメ、平行紋以外のタタキメ、そして2次タタキといった相違する点から、その波及の過程を推定してみよう。

九州地方に現われた頭初のタタキ技法は、次のようなものだったのではないか。すなわち羽子板状叩き板のほかに棒状叩き板があった。両方とも木目に沿う木取りである。羽子板状の叩き部には無紋と有紋とがあり、有紋のそれは平行紋で、木目に平行に溝を彫り込んだ。縄を叩き部に巻きつける手法はなかった。内面にあてるのは素手か円礫かである。平坦な作業台の上に40cmぐらいを目処に粘土を積み上げてはタタキを行なう工程を繰り返す。だから器高が大体40cm以下なら、粘土を口まで積み上げてから初めてタタキを行なう。つまり積み上げとタタキとの組み合わせが1回か、数回繰り返すかは土器の大きさ次第である。土器に対する肘の高さは何箇所かで一定に保っていたので、段階的な移動となる。肘を底部高にする場合以外は、腕や手首の位置は肘と同じか低く傾けて叩く。この時作者は、土器の周囲をめぐるか、土器をまわすかするが、低い部位から一周ずつ水平に叩き始める場合と高い部位から水平に一周ずつ叩き始める場合とがあったらしい。タタキメの配列は、結果的に円弧状を呈することになる。この技法で土器の形をある程度変えた。それから縦ハケメをその上に行なう工程に進む。

このタタキ技法が、東方に伝わっていった。まず棒状叩き板を失う。さらに畿内地方を中心に叩き部の紋様を一部多様化し、近畿地方以東で縦ハケメ後に行なうタタキを加えた。ところが一色青海遺跡には平行紋しかないから、畿内地方を迂回したととらえることができる。このように原形の一部に欠落や肥大、追加が起こってはいても、技法の基本的なあり方はほぼそのまま東海地方にまで到達していたのである。くわえて大変に重要な

のは、西日本の各地域で、このタタキ技法を、土器作りの工程に完全に組み込んでいた点である。

(6) 弥生土器のタタキ技法が瓦質・陶質土器のタタキ技法の影響下になしたこと

ところで朝鮮半島に由来する瓦質・陶質土器が弥生時代中・後期から古墳時代にかけて日本列島に流入している。窯を用いて焼成し、還元炎で灰色化したこれらの土器には、タタキメを残すものがある。底部を叩いて丸底化するなど高度なタタキ技法を駆使していたのは確かである。

このうち日本で出土した古墳時代初頭以前の資料について、武末純一氏⁽⁶⁹⁾や定森秀夫氏⁽⁷⁰⁾の研究、埋蔵文化財研究会で集めた資料⁽⁷¹⁾、さらに最近の資料⁽⁷²⁾によって、ここではそのタタキの道具に特に注目してみておきたい。

瓦質土器と陶質土器では叩き板の叩き部は基本的に有紋であり、平行紋のほか格子紋もかなりある。叩き板の主軸方向に木目が走るが、平行紋は溝を木目に直角に刻むのが圧倒的である。格子紋はこの平行紋にさらに直角に溝を刻む。このほか縄を叩き部に巻きつける縄タタキも多い。縄は叩き板の主軸に対し直交方向に巻く。当具痕には、木目をとどめるものがあることから、木製品を多用していたのは確かである。その形状は、後の土製品⁽⁷³⁾から、茸形であったと推定できる。

このように道具に限っても、瓦質・陶質土器を叩く時に用いた道具は、前・中期の弥生土器のそれと違っている。しかしながら例えば縄タタキの有無は、要素の欠落であろうと指摘されるかもしれない。だが平行紋の溝の刻み方はこれで説明することはできない。しかも縄の方向と平行紋の溝の方向は一致しているのであり、両者が同一の規範に則っていたのは明らかである。したがって瓦質・陶質土器と弥生土器のタタキは、異なった規範にあって溝を刻んだとみなさざるをえないので

ある。つまり縄タタキの欠如は決して欠落現象などで説明できないのである。しかも当具も異なっていた。さらに叩き板は口縁部の近くは口縁に平行に叩いているから、体部上半部における平行紋や縄蓆紋の方向は口縁部に直交する角度にあり、視覚的效果の点においても、弥生土器のそれとは異なっている。つまり両者のタタキ技法はともに形状を改変させるほど高度な技術水準にあったのであるが、その間に近縁な文化的コンテクストを求めるのは困難である。すなわち窯を有した瓦質・陶質土器の製作法のもとに、弥生土器のタタキ技法は成立しないのである。

(7) おわりに

弥生時代前期にまず九州地方に現われたタタキ技法は、中期後葉には一色青海遺跡が所在する東海地方に到達し、その地でタタキ技法を駆使して土器を作るようになった。技法上の基本的な規範は、九州地方から東海地方西部にかけて広く西日本に通底する。これに遅れて日本列島に流入した瓦質・陶質土器もタタキ技法を駆使して作った土器であったが、両技法は近縁な系譜関係にはない。弥生土器の最初期のタタキ技法が円弧状タタキメを残すなど、技術的にすでに一定の段階にあったことからみて、この技法が日本列島内で自生したと想定することはできない。すなわちこれと同様な技法があらかじめ大陸にあって、この技法が日本列島に伝わり、弥生社会がこれを受容したと、推論せざるをえないのである。つまり弥生土器が得たタタキ技法と瓦質・陶質土器を作ったタタキ技法は、そもそも系列を異にした2者として列島の対岸域に相次いで到来したとみななければならない。東海洋上の列島の住人が、弥生時代に初めて遭遇し修得したのは、このうちの第一波のタタキ技法であったに違いないのである。

本稿をまとめるにあたっては、李弘鐘、安藤広道、安楽勉、石橋新次、伊藤淳史、伊藤実、岩本正二、上村安生、大野左千夫、大脇潔、岡内三真、奥和之、柏原孝俊、勝浦康守、兼康保明、川西宏幸、岸本道昭、鬼頭剛、小池哲史、佐川正敏、定森秀夫、篠宮正、下澤公明、末延一人、菅波正人、杉山一雄、鈴木元、鈴木康之、高橋徹、田崎博之、田代弘、谷口恭子、田畑基、次山淳、坪根伸也、出原恵三、中川義隆、中澤勝、中屋克彦、伴野幸一、平井典子、平井泰男、平川誠、樋口隆久、藤田三郎、前田達男、松井忠春、宮崎貴夫、三好孝一、宮腰健司、村上恭通、安英樹、山口譲治、山元敏裕、吉留秀敏、横田義章、渡辺淳子の諸氏に御教示、御援助賜った。また井上直夫氏と中村一郎氏は第13-2図に掲載した写真を撮ってくれ、土江裕子氏は第13-4図のすばらしい絵を描いてくれた。私は、以上の方々に対して、あらためて深い感謝の意を表する。さらに私のいたらぬ文章に発表の場を作ってくれた蔭山誠一氏と石黒立人氏の友情と、紙面を提供してくれた愛知県埋蔵文化財センターの御厚意に対して、心から感謝する。

(1998年春)

註

- (1) 佐川正敏氏に教えていただいた。
江西省文物管理委员会「江西万年大源仙人洞洞穴遗址試掘」『考古学報』1963年第1期1～15頁。
- (2) 本編では白家村遺跡の報告によって、器表面の縄目をタタキメとする立場に立つ。
中国社会科学院考古研究所『臨潼白家村』(中国田野考古報告集考古專刊丁種第44号)1994年93・94頁。
だが佐川正敏氏と次山淳氏に教えていただいた李文傑氏の著書によれば、これに併行する甘肅省大地湾遺跡出土土器の縄目は捺糸紋であるという。
李文傑『中国古代製陶工藝研究』(中国歴史博物館叢書第3号)1996年25～38頁。
また同じ縄目について張朋川氏と周広済氏は、外型との間にはさんだ網の圧痕とする。
張朋川・周広済「試談大地湾一期和其他類型文化的關係」『文物』1981年第4期10頁。
- (3) 佐川正敏「土器の使用のはじまり「中国」—中国各

- 地の最古の土器—」『考古学ジャーナル』239巻1984年13～19頁。
- (4) 邵望平(西江清高訳)「黄河流域の新石器文化」、岡(小川誠訳)「新たに発見された大汶口文化」『新中国の考古学』1988年27～35・81～93頁。
安志敏「裴李崗、磁山と仰韶—試論中原新石器文化的淵源及發展」『考古』1979年第4期334～346頁。
安志敏「略論華北の早期新石器文化」『考古』1984年第10期936～944頁。
嚴文明「中国史前文化的統一性と多様性」『文物』1987年第3期38～50頁。
- (5) 烟台市文物管理委员会「山東烟台白石村新石器時代遺址発掘簡告」『考古』1992年第7期577～587頁。
- (6) 深澤芳樹「タタキの民族誌」『みずほ』第15号1995年54～61頁。
- (7) 古墳時代初頭以前の発掘資料に、愛媛県宮前川遺跡、大阪府東奈良遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡から出土した3点がある。
愛媛県埋蔵文化財調査センター「宮前川遺跡中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書」(埋蔵文化財発掘調査報告書第18集)1986年第162図、図版1552-2, 251・252頁。
原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第1巻本編11977年図106, 225頁。
田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報』平成3年度1992年10頁。
- (8) 深澤芳樹「尾張における凹線紋出現の経緯—朝日遺跡出土土器の検討から—」『朝日遺跡V』1994年273頁。
- (9) 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号1972年48・49頁。
- (10) 以下の各個体については、蔭山誠一氏と観察・検討した結果である。また石黒立人氏や宮腰健司氏から得た重要な指摘を生かした。
- (11) a 橋口達也「甕棺のタタキ痕」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年475・476頁。
b 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X IV 1978年196～198頁。
- (12) a 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第3号1974年21・22頁。
b 都出比呂志「弥生土器のタタキ技法」『弥生文化の研究』第3巻1986年43～51頁。
- (13) 大型壺形土器の系譜下にある。前掲書註(11-b) Fig.235-K2B。
- (14) 平井典子氏に教えていただき、平井泰男氏と杉山一雄氏にみせていただいた。
岡山県古代吉備文化財センター「津寺遺跡3山陽自動車道建設に伴う発掘調査12」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104)1996年図版139-1053。
- (15) 平井泰男氏にみせていただいた。
岡山県教育委員会『百間川兼基遺跡1百間川今谷遺跡1』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51)1982年第279図1135。
- (16) 山元敏裕氏にみせていただいた。

- 高松市教育委員会『久米池南遺跡発掘調査報告書』1989年第52図2.
- (17) 勝浦康守氏にみせていただいた。
徳島市教育委員会「名東遺跡発掘調査概要―宅地造成工事に伴う発掘調査―」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要3』1993年第8図10.
- (18) 出原恵三氏に教えていただき、末延一人氏にみせていただいた。
香我美町教育委員会『高知県香我美町下分遠崎遺跡(Ⅰ)』(香我美町教育委員会埋蔵文化財報告書第4集)1989年第23図131.
- (19) 岸本道昭氏にみせていただいた。
龍野市教育委員会『養久山・前地遺跡―揖龍広域ごみ処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』1995年第34図・第37図88・第41図100.
- (20) 篠宮正氏にみせていただいた。
兵庫県教育委員会『神戸市西区玉津田中遺跡―第5分冊―田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』(兵庫県文化財調査報告第135―5冊)1996年図版260―7428, 図版262―7449.
- (21) 奥和之氏にみせていただいた。
大阪府教育委員会『大里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1986年挿図35―118.
- (22) 三好孝一氏に教えていただき、みせていただいた。
大阪府教育委員会・大阪文化財センター『河内平野遺跡群の動態Ⅵ近畿自動車道天理吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書南遺跡群弥生時代中期編』1993年図版Ⅳ―1―71.
- (23) 和歌山県教育委員会『和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報』1968年第29図9.
- (24) 岡内三真氏にみせていただいた。
京都帝国大学文学部考古学教室『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊)1943年第34図426～430・433・434・453.
- (25) 平川誠氏、谷口恭子氏にみせていただいた。
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩吉遺跡Ⅲ中小河川改修事業大井手改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査』1991年第154図3.
- (26) 川西宏幸氏にみせていただいた。
古代学協会『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡―』(平安京跡研究調査報告第11輯)1984年第54図103.
- (27) 松井忠春氏、田代弘氏、中澤勝氏にみせていただいた。例えば、
a 京都府埋蔵文化財調査研究センター「千代川遺跡第6・7次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第14冊』1985年第23図2, 第24図7.
b 亀岡市教育委員会『千代川遺跡第11次発掘調査報告』(亀岡市文化財調査報告書第15集)1987年第9図119.
- (28) 中屋克彦氏、安英樹氏にみせていただいた。
石川県埋蔵文化財センター『金沢市戸水B遺跡金沢西部土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』1994年第39図.
- (29) 兼康保明氏にみせていただいた。
滋賀県教育委員会『一般国道161号(湖北バイパス)建設に伴う今津町内遺跡発掘調査報告書―高田館遺跡―』1991年図版36―9.
- (30) 伴野幸一氏にみせていただいた。例えば、
滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ―滋賀県守山市服部町所在―』1986年図版248―E281, 図版249―E287・E288.
- (31) 鈴木元氏にみせていただいた。
- (32) 上村安生氏にみせていただいた。
三重県教育委員会『納所遺跡―遺構と遺物―』1980年第27図86.
- (33) 高橋護「弥生土器の製作に関する基礎的考察」『鎌木義昌先生古稀記念論集』1988年125～148頁。
擬口縁の激減が、これに対応する現象であろう。
- (34) 横山浩一「須恵器の叩き目」『史淵』第117輯1980年135頁.
- (35) 吉留秀敏氏にみせていただいた。
福岡市教育委員会『比恵遺跡第9・10次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集)1986年図107―20.
- (36) 前掲書註(14)図版142―1072.
- (37) 飛鳥藤原第85次調査で出土している。
- (38) 前掲書註(25)第155図4.
- (39) 前掲書註(12―b)44頁.
- (40) 前掲書註(11―a)第2図9・10, 472・475頁.
- (41) 中間研志「Ⅵ 弥生時代の遺構と遺物」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X IV 1978年198頁.
- (42) 前掲書註(11―a)472・475頁.
- (43) 横田義章氏、小池史哲氏にみせていただいた。
- (44) 鹿野忠雄「紅頭与ヤミ族の土器製作」『人類学雑誌』第56巻第1号1941年41～49頁.
- (45) 江西省文物工作隊「江西鷹潭角山窯址試掘簡報」『華夏考古』1990年第1期34～50頁.
- (46) 竜山文化の主な資料は以下である。
中国社会科学院考古研究所山西工作隊「山西襄汾県大柴遺址発掘簡報」『考古』1987年第7期586～596・652頁。
商丘地区文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「1977年河南永城王油坊遺址発掘概況」『考古』1978年第1期35～40・64頁。
台州地区文管会・仙居県文化局「浙江仙居下湯遺址調査簡報」『考古』1987年第12期1057～1061頁。
德州地区文物工作隊「山東禹城県邢泰汪遺址的調査与試掘」『考古』1983年第11期966～972頁.
- (47) 宮の前遺跡発掘調査団「福岡市大字十六町宮の前遺跡(A～D地点)」1971年第5図13～19, 29～33頁。
この類例は、三重県津市高松遺跡にもある。
三重大学歴史研究会・原始古代史部会「三重県津市高松弥生遺跡について」『古代学研究』371964第8図・21頁.

- (48) 井上裕弘「甕棺製作技術と工人集団」『論集日本原史』1985年512頁。
- (49) 前掲書註(12-a)22頁。
- (50) 前掲書註(20)図版281-7730。
- (51) 飛鳥藤原第85次調査区で出土している。
- (52) 鈴木元氏にみせていただいた。
- (53) 前掲書註(11-a)471-476頁。
橋口達也「2 甕棺製作技術についての若干の所見」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-X X V-』福岡県教育委員会1978年96・97頁。
橋口達也「3. 甘木・朝倉地方甕棺についての若干の所見-とくに栗山遺跡出土甕棺を中心として-」『栗山遺跡』(甘木市文化財調査報告第12集)甘木市教育委員会1982年168頁。
- (54) 伊藤実氏に教えていただき、岩本正二氏と鈴木康之氏にみせていただいた。
広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡-国鉄井原線建設に係る発掘調査報告-』1981年第21図6。
- (55) 前掲書註(14)図版118-780, 図版141-1068, 図版142-1072・1073。
岡山県古代吉備文化財センター『津寺遺跡2山陽自動車道建設に伴う発掘調査10』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98)1995年第734図251-253。
- (56) 前掲書註(16)第52図1。
- (57) 甘木市教育委員会『栗山遺跡』(甘木市文化財調査報告第12集)1982年図版B-1左上。
- (58) 田畑基氏にみせていただいた。
- (59) 蛸壺形土器にある。前掲書註(20)図版270-7535-7538, 7540, 7543。
- (60) 前掲書註(25)第143図。
- (61) 前掲書註(28)第39図。
- (62) 鈴木元氏にみせていただいた。
- (63) 前掲書註(27-a)第26図17。
- (64) 前掲書註(11-a)471-479頁。
- (65) 坪根伸也氏と高橋徹氏に教えていただき、かつみせていただいた。
- (66) 平井泰男氏にみせていただいた。前掲書註(15)第279図1136。
- (67) 國下多美樹氏は凹線紋出現以前に位置づけた。
國下多美樹「弥生時代中期のタタキ甕をめぐる諸問題」『Y A Y 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』1996年71-76頁。
- (68) 出原恵三氏に教えていただき、末延一人氏にみせていただいた。
前掲書註(18)第23図131。
- (69) 武末純一『土器からみた日韓交渉』1991年。
武末純一「西日本の瓦質土器」『日韓交渉の考古学』弥生時代編1991年204-210頁。
- (70) 定森秀夫「陶質土器からみた近畿と朝鮮」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 1994年77-110頁。
- (71) 埋蔵文化財研究会『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸

問題』1987年。

- (72) 田中清美「加美遺跡1号方形周溝墓出土の陶質土器」『韓式系土器研究』VI 1996年37-43頁。
および安楽勉氏と宮崎貴夫氏にみせていただいた長崎県原の辻遺跡出土資料、下澤公明氏にみせていただいた岡山県上東遺跡出土資料による。
- (73) 亀田修一「陶製無文当て具小考」『横山浩一先生退官記念論文集I 生産と流通の考古学』1989年273-289頁。

図版出典一覧

- 第13-3図-1: 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X IV 1978年 Fig.180。
- 2: 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡-国鉄井原線建設に係る発掘調査報告-』1981年第21図6。
- 3: 岡山県古代吉備文化財センター『津寺遺跡3山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104)1996年図版118-780。
- 4: 徳島県教育委員会「名東遺跡発掘調査概要-マンション建設工事に伴う発掘調査-」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要3』1993年第9図63。
- 5: 兵庫県教育委員会『神戸市西区玉津田中遺跡-第5分冊-田中特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』(兵庫県文化財調査報告第135-5冊)1996年図版278-7708。
- 6: 京都帝国大学文学部考古学教室『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊)1943年第31図363。
- 7: 鳥取県教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩吉遺跡Ⅲ中小河川改修事業大井手改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査』1991年第182図48。
- 8: 石川県埋蔵文化財センター『金沢市戸水B遺跡金沢西部土地地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』1994年第35図3。
- 9: 滋賀県教育委員会『長浜市鴨田遺跡発掘調査概要』1972年図版2-5。